

牧師室から(2023.6.4)

過ぐる主日にはペンテコステ礼拝を共に守った。聖霊の保証を再確認して歩み続ける勇気を得ることができたのは感謝であった。ところが礼拝が終わった後、牧師館に帰ってから、説教をした善姫牧師が、今日の礼拝で讃美歌を選ぶのを間違ったと言いつつしよげていた。話を聞いてみると、インターネットで聞いてみたら良かったので選んだようだが、350番はこの教会では馴染がなく皆が歌いにくくて元気がなくなったというのである。

実をいうとこの曲は私も知らない讃美歌であった。歌詞は前の讃美歌集からあったようだが曲はかなり新しいもののようである。気丈な妻が落ち込んでいるのは珍しいので慰めるつもりでもあったが、私はこの曲の出だしのオルガンの響きを聞いたときに、まさに聖霊降臨の響きを感じたのである。3度の抜けた空虚な5度は短調長調の区別がない宗教的な和音であり、更に上のソプラノがテノールの音とぶつかって不協な音を出している。これが何とも言えない不安定でそして玄妙な雰囲気醸し出しているのである。これから何か神秘的なことが起りそうな予感と緊張感を感じさせるのである。因みにこの曲のシャープ二つを取って移調して弾いてみたが、あまり面白くない。原曲の調の響きがずっと良いのである。暫くこの和音の響きを聞いて弾いているうちに思い起こしたのがメシアンである。彼のオルガン曲、特に「キリストの昇天」やまた「主の降誕」を彷彿させる。キリストが天に昇る、或いは主が天から降誕するという天上と地上の間の昇降の神秘性が感じられる曲であるが、聖霊が降るというのもこの意味では同じである。

作曲者は日本人であるが、正直に言って私自身外国の古い讃美歌は結構好きだが、日本人の作った現代の曲は軽んじてきたという悪い偏見があった。これは反省すべきことであると思った。この作曲者高浪晋一氏については、一度お会いしたことがあるので次回への続きとしておく。

(鈴木淳一牧師)